

グローバル化・日本・言葉 Globalization-Japan-Language

辻 裕
Yutaka TSUJI

ホソカワ粉体工学振興財団 常務理事
Hosokawa Powder Technology Foundation, Managing Director.



1. 拡大するグローバル化

あらゆる分野でグローバル化が急速に押し寄せている。グローバル化と言う代わりにボーダレスと言っても同じである。1つの国の中で閉じていた事柄が、次々に国境を越え出した。国際単位やISOなどの国際スタンダードの制定に見られるように、グローバル化は今に始まったことではない。しかし現在のグローバル化はその範囲が従来には想像できないスケールで起きている。例えば大学教育にまでボーダレスの波が寄せている。異なった国の大学間における単位の相互認定はヨーロッパではいち早く始まった。我が国でも外国の大学で取得した単位を認める制度はどんどん進んでいる。大学のランキングまでもが国際の場で論じられ

- ・昭和45年(1970)3月 大阪府立大学工学研究科航空工学専攻 博士課程 中途退学
- ・同年4月 大阪大学工学部産業機械工学科 助手, 准教授, 教授を経て
- ・平成19年(2007)3月 大阪大学工学研究科機械工学専攻 定年退職
- ・同年4月 ホソカワ粉体工学振興財団 常務理事

ている。それらの中には怪しげなものも沢山あるが、国内でのランキングが意味をもたなくなる時代が迫っている。

グローバルにせよボーダレスにせよ、これらの言葉には国境なき世界を目指す地球人類の究極の姿に通じるという見方もあり、肯定的に捉える人達もいるであろう。私にはあらゆる事物が均質化に向かうエントロピーの増大にしか思えない。もちろん便利な面もあるが、世界が実につまらない方向に向かっているようにしか感じられないのだ。しかし好むと好まざるに関わらず、この流れを止めることはできない。ここで注意すべきことはグローバル化によって得をする国と損をする国があり、我が国は完全に損をしている。その原因はひとえに言語にある。国際語としての地位が確立している英語の環境のもとでは、先進国の中で日本ほどその環境に関して不利な国はない。ドイツ人やフランス人にとっても英語は外国語になるが、我々から見れば、それらヨーロッパの言語は互いに方言のようなものである。

2. 大英帝国の偉大な遺産

外国語に対して書き言葉で向き合う場合、読解に時間は少しかかるが正確に理解することに大きな困難はない。作文であっても、じっくり推敲した後に自分の考えを他者に伝えることができるので、まだ救いはある。しかし話し言葉を前提とする研究発表や交渉の場では言語のハンデイは致命的である。国際会議の質疑の場において考えていることの半分も言えず、不完全燃焼に終わって会議場を後にした経験をお持ちの方は非常に多いと思う。もちろん私自身の経験でもある。以前は国際的な交渉の場にでる日本人はほんの一握りの人達たちだけであった。これからは、普通の研究者、

技術者が国境を越えた会議に出なければならない場合がますます増えることが予想される。会議の出席者はそれなりの権限を持って特定の国や団体を代表して会議に臨んでいると見なすのが世界の常識である。会議の中で重要な決断を迫られたり、駆け引きが必要な場合に、自国に持ちかえってから対応しますという訳にいかないのだ。何かを多数決で決定する場合でも、多数決を取る前に先ずそれぞれの意見が述べられる。その際、英語を母語とする人がその自国語を使って巧妙に意見を説明できる国と、直訳の英語で時には意味不明といやみを言われながら意見を述べる者との差はきわめて大きい。将棋でいえば飛車角抜き勝負、余程の実力差があつてようやく対等になる。日本人は何を考えているのかわからない、などと言う欧米人がたまにいますが、その人が取るに足らない立場の人であれば、単なる無知で済まされるが、指導的な立場にいて本気でそのように述べているとすれば、問題は深刻である。

思えば英語を世界中に広めた大英帝国は英語圏の子孫に計り知れない利益をもたらす大きな遺産を残した。19世紀末までに実に世界人口の4分の1を支配した国力の結果として国際語の地位を築いたことは明らかである。言語学的には英語はどちらかと言えば欠陥の多い言語であり、決して世界の標準語として適しているわけではない。事実、英国においてすら、1731年まで法廷記録はフランス語で取られていたのである。しかしこんな文句を言っても始まらない。今を生きている我々は現実へ対応しなければならないのだ。

3. 和文論文集の危機と「強い」日本語

書き言葉の話が出たことで、和文論文集に関して日本で今深刻な問題が発生していることにも触れないわけにいかない。研究者を評価する際に、日本語で発表された論文を英語のそれに比べて低く評価する傾向がグローバル化の大波とともに大学に押し寄せているのである。この傾向が強まると日本語で研究成果を発表する研究者はいなくなる。日本では優秀な研究成果が日本語で発表されてきた。その理由として、日本そのもののキャパシティが大きいことと学術の水準が高いことがあげられる。アメリカや中国などの国と比べると確かに小さな国であるが、イギリスに比べると人口は2倍である。私は更に、日本語が極めて「強い」言語であることも理由の1つと考えている。表意文字である漢字とひらがな・カタカナの2種類の表音文字を

使い分ける記述法によって文化や芸術で高い水準が維持されてきた。科学技術分野も強い日本語で支えられてきた。英文を和訳すればすぐにわかることであるが、漢字のおかげで、日本語では少ない行数で事足りるのである。カタカナを使うことで外国人の人名や外国語の単語が容易に日本語として扱われる。カタカナに類する文字を持たない中国語では欧米の科学者名を全て漢字の当て字で表現しなければならない。外国人名が頻出する科学技術分野で中国語がどれほど不便であるかは容易に想像できるであろう。今の日本人にとって不運なことは、皮肉なことに強い言語を母語として習得していることなのである。一度強い母語を習得すると、外国語の習得が非常に困難になると云われている。母語が弱い国の方が英語への適応は容易なのである。日本では明治以降、科学技術の専門用語の日本語への置き換えが完璧になされ、高度な知識の獲得が日本語だけで可能であり、日本語の論文集が育ち、それが日本の科学技術の発展に大きく寄与したことはよく知られている通りである。和文論文集を単純に軽視すると、取り返しのつかない結果になる。

4. むすび

上では問題点ばかりを述べたが、ではどうすればいいのだろうか。非英語圏に生まれついた人間の宿命として、英語圏の人間ならしなくてよい苦勞をすると覚悟を決めるのである。英語表現能力をきっちり自分ものにして、ハンデを少なくするよう努力するしか手がない。世界を眺めると英語圏以外の国の知識層はすべて英語と格闘している。歴史的には長く国際語の地位を占めていたフランス語圏の人達は我々よりもっと複雑な心境で英語万能の時代をみていることであろう。ヨーロッパにおいてもハンガリーやフィンランドは英語とは別の言語圏にある。しかし、これらの国の研究者は、英語でのコミュニケーションにおいて困難を感じているように見えない。アジアの知識層も日本の知識層に比べて言葉のハンデをかなり克服している。日本の知識層だけが努力を怠っているように思える。前述の私の論理では、強い母語が原因ということになるが、それで片づけては何の展開もない。私の友人の中には英語の達人が何人もいる。その人たちは日本語と英語を使い分けて日本にも世界にも情報を発信している。その姿をみると、あながち悲観論に陥ることはないかもしれない。
